

# 北海道空知地域における 炭鉱遺産の保存活用

酒井 裕司<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>イメージランドスケーププランニング（〒064-0959 北海道札幌市中央区宮ヶ丘2丁目1-1 ラファイエット宮ヶ丘303号）

E-mail: y-sakai2007june@y3.dion.ne.jp (Corresponding Author)

<sup>2</sup>NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団（〒068-0021 北海道岩見沢市1条4丁目3）

E-mail: sakai@soratan.com

「炭鉱遺産」は明治から続く土木技術の結晶である。空知地域における炭鉱の歴史は北海道開拓による1879（明治12）年、官営幌内炭鉱（三笠）の開鉱が近代炭鉱の幕を開け約150年、閉山によりブラウンフィールドとなった跡地の一部は地域資源として保存活用されている。残された「炭鉱遺産」の保存活用は、所有者や自治体だけに任せるのではなく、地域において価値を共有、活用により保存していくことが重要である。また語り伝えていく人材の育成が最大の「炭鉱の記憶」の保存の可能性となる。

**Key Words:** coal mine heritage, preservation and utilization, regional revitalization, civil engineering heritage, Non-Profit Organization

## 1. 歴史が浅いと言われる北海道

太古の昔から、時は刻々と刻まれており連続している。北海道は歴史が浅いと言われるが、自然と共存しながら暮らしていた縄文人の歴史は長く、アイヌ民族の歴史は13世紀頃より今日へ続く。アイヌの集落には住居や様々な道具の他、畑（川洲畑）や道路、壕など土木的工物も整備され、長期間、安定した暮らしを維持してきた。北海道の歴史が浅いのは、いわゆる和人目線での日本の歴史、約150年なのである。

浅いと言われる時間軸は、アイヌが暮らしてきた集落、自然空間とは全く違う目的、スケールをもった行為「開拓」からの歴史である。北海道開拓は1869（明治2）年、開拓使の設置、その目的は国土防衛と産業開発であり、後者は農地開拓と地下資源開発が重要使命であった。地下資源とは「黒いダイヤ」石炭の採掘である。そして、開拓から約30年という短い期間に、石炭生産（三笠）から製鋼所開設（室蘭）という近世から濃密な近代化が進められ、そして現代へと歴史を刻んだのが北海道なのである。

## 2. 北海道における炭鉱、鉄道、港と鉄鋼

北海道における小規模な石炭採掘は1854（嘉永7）年、日米和親条約に基づき外国蒸気船への燃料補給が求められ、1856（安政3）年オソツナイ（釧路）の路頭炭を、その後、白糠で掘られ、また同年、萱沼（泊）でも石炭が発見され、1862（文久2）年には採掘が始まっている。本格的な近代炭鉱の歴史は1879（明治12）年、官営幌内炭鉱の開鉱により始まる。1882（明治15）年には、幌内炭鉱（三笠）の石炭を積出港である手宮（小樽）への輸送路、「幌内鉄道」が全通、これにより内陸部開発も進んでいく。1887（明治20）年には北海道炭鉱鉄道会社（北炭）が払下げを受け、その後、空知炭鉱（歌志内）、夕張炭鉱（夕張）などの開発、1892（明治22）年には岩見沢―室蘭間が鉄道で結ばれ室蘭も積出港として発展を始める。日露戦争後、1906（明治39）年の鉄道国有法により北炭の優良鉱区、鉄道網の独占体制は崩れ、本州より財閥系企業が北海道進出を果たす、一方北炭は鉄道売却の資金により室蘭に日本製鋼所（北炭と英国アームストロング社・ピッカース社の合弁企業）を設立、鉄のまちとしてスタートする。

### 3. 石炭産業の土木的価値

北海道における石炭産業は順調に成長していくが第1次世界大戦や世界恐慌による不況により石炭需要の激減、1931（昭和6）年の満州事変をきっかけに軍需工業の発展などで石炭増産、第2次世界大戦、敗戦により生産量は大きく落ち込むが、戦後の傾斜生産方式による増産対策により1966（昭和41）年にピーク（約2,300万トン）を迎える。この間、炭鉱における様々な技術発展、効率化とともに施設の大型化、深部開発が進められていく、これらの発展を支えたのは機械や設備、建築とともに土木技術でもある。

#### (1) 炭鉱の土木技術

炭鉱施設における土木的な技術の一例は以下の通りである。

- ・真っ暗な地下空間の炭層、地層に合わせて行う坑内測量、成果を立体的に重層する坑内測量図の製図
- ・坑道はトンネル技術、住友赤平炭鉱（赤平）では総延長200kmに達する。さらに坑道は換気システムのルートでもあり、隔壁により入気と排気にコントロールされ、同時に給排水のルートでもある。地下水の排水、プレジャーポンプによる水圧での機械操作、空知炭鉱（上砂川）では水力採炭も行われている。
- ・基幹坑道には線路が敷かれバッテリー電車が疾走する。斜坑では人車などがケーブル式により軌道上を昇降
- ・立坑は巨大なエレベーター施設、橋梁の技術で製作されている。北炭幌内炭鉱立坑（三笠）では2段デッキエージ（48人乗り）を深さ1,000mまで昇降。住友奔別炭鉱立坑（三笠）は東洋一の立坑と称され、2基の4段デッキエージ（72人乗り）、2基のスキップ（原炭輸送）が地下735mの世界と連結する。
- ・地下から揚炭された原炭は選炭場で石炭（製炭）が生産され、残った岩石などは地上に大きな山（ズリ山）として堆積される。北炭赤間炭鉱（赤平）のズリ山は標高約200m、平均斜度18度、ランドマークとして存在する。

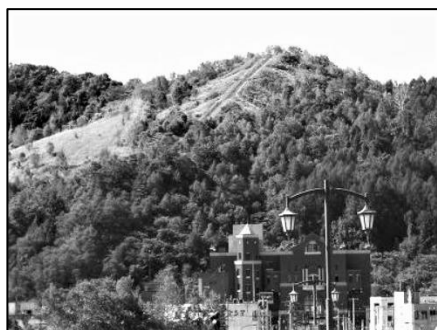


写真-1 旧北炭赤間炭鉱跡のズリ山

#### (2) 主戦場は地下空間

今日、地上に見えている巨大な建築物や構造物は、地下空間に広大な採炭の場が存在していた目印であり、炭鉱の本体は地下空間なのである。さらに地下の生産体制の変化が地上世界の施設、街も呼応して移動していった痕跡もある。

### 4. 「炭鉱の記憶」の損失の危機

昭和30年代後半より、炭鉱産業は陰りを見せ始める。スクラップアンドビルドにより各社の主要炭鉱は生き残りを掛けるが、1962（昭和37）年の原油輸入自由化は石炭から石油へのエネルギー革命を加速、閉山が進んでいく。さらに外国産石炭の輸入自由化により国内石炭産業は壊滅的影響を与える。地域の歴史、場所によっては地域の根源でもある炭鉱産業の施設は、何度かの損失の危機に見舞われ、残ったものが「炭鉱の記憶」として存在している。失われる原因は、その炭鉱の状況により主に3つの段階に区分される。

- ①操業中；生産性や安全性など工場としてのシステム、技術の変化により古い施設は撤去、あるいは改修され常に変化、更新され失われていくものも多い。
- ②閉山時；最も多くの損失は閉山時である。炭鉱夫たちの雇用確保という意味合いもあり坑口密閉や施設の解体など、最後の作業が行われた。さらに施設の撤去とともに、炭鉱産業の都市、自治体という「記憶」の消去、書き直しによる新たな産業や明るいまちのイメージ形成も行われた。
- ③近年；閉山後は人為的撤去とともに、自然圧による崩壊や土砂、みどりの被覆が進んでいく。空知地域は道内有数の豪雪地帯であり、積雪や凍結融解による破損、倒壊、さらに近年では一部のマニアなどによる立入り域禁止区域への入場がSNSにより拡散、所有者の危機感につながり解体などの話も上がる。



写真-2 積雪により崩壊した旧奔別炭鉱選炭機ホッパー屋根

一方、最近では「炭鉱遺産という価値」が理解され始め、終わった施設、ゴミと位置づけられていた空間から

地域の資源という評価も一般化し、保存、活用への動きも各所で進んでいる。

## 5. 炭鉱遺産の保存、活用

様々な施設、構造物はそれぞれ目的を持ち、その機能が失われたとき、2つの結末が待っている。それは、どんなに価値のある土木構造物あるいは建造物、空間であっても同様に「解体撤去」されるか、「残されるか」である。当初の機能を失っても現存するものと解体撤去されるもの、閉山時の会社の状況や施設の配置環境、規模にもより放置され残っている遺産も「炭鉱の記憶」の特長でもあり、生末はそれぞれである。明治時代の遺産は少ないが、坑口など閉山時まで使用され続けていた施設が残っている。旧北炭夕張炭鉱第三斜坑（天龍坑）坑口（夕張）は1900（明治33）年の開坑、現在は夕張市石炭博物館の展示施設として保存されている。大正から昭和にかけての遺産は立坑なども残っており、素材や工法など時代の特徴を示す施設も存在する。旧北炭幾春別炭鉱（三笠）は1885（明治18）年開鉱しているが錦立坑は1933（大正8）年掘削され、現存する道内最古の立坑櫓である。昭和中期には大型化した最新施設が導入されていく、旧奔別炭鉱立坑櫓（三笠）は1960（昭和35）年建築、高さ約51m、深さ735mのエレベーターで当時の最新技術が注ぎ込まれており、建設過程は産業映画としても記録されている。



写真3 道内現存最古の旧北炭幾春別炭鉱の錦立坑櫓

保存の状態は、上記のように現場にオリジナルが存在する場合から現物の無い保存もあり得る。

### (1) 実物が残る、資料が残る、記憶に残る

地上に残る炭鉱遺産は、地域の歴史の証であり視覚的な情報とともに様々見えない資源、風景も伝えてくれる。旧北炭幌内炭鉱跡（三笠）に残るコンクリート構造物はそれだけでは当時の風景と結びつかないが、創業時の写真と照らし合わせることでその場所が特定され、浮かび上がる。たった一つの構造物が過去と現在を一体とする

のである。

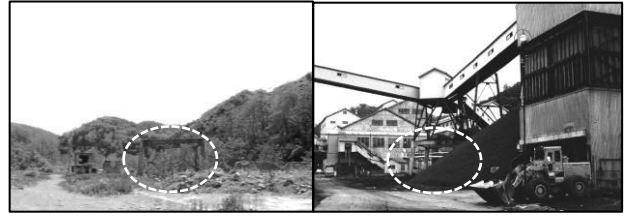


写真4 旧北炭幌内炭鉱跡に残る構造物(左)と創業時(右)

様々な施設が「現地に保存」されていくことは理想ではあるが、経済面や安全面などから残れない施設もあり得る。現物が残せない場合、詳細な調査による「記録の保存」が重要である。記録の保存では、書類や写真、映像による保存のほか、存在した場所に説明板や写真の配置、記念碑なども記録の保存として有効である。また記録はされていないが、元炭鉱夫や地域住民の思い出、記憶として残っている「記憶の保存」も重要である。炭鉱遺産ではその多くは地下深くの出来事であり、記録にも残っていない記憶、思い出は経験であり大切な保存となっている。ただし「記憶の保存」は伝えていかなければ失われてしまう保存でもあり、伝承あるいは「記録の保存」への移行が必要である。三笠ジオパーク推進協議会では平成28年より三笠における炭鉱の記憶記録事業として様々なライフヒストリーの聞き取り調査を行っており貴重な「記憶の保存」を「記録の保存」へ移している。

### (2) 様々な活用による保存

産業遺産の保存では、当初の産業としての機能を失っても、新たな別の機能や価値を持ち続けることが重要であり、その機能は様々である。施設としての学術的価値の活用、空間としての新たな機能、例えば芸術展示空間としてのアートプロジェクトや歴史観光の場、また教育資源として総合学習や研修旅行の活用、絵画の授業でも活用可能である。



写真5 炭鉱遺産の空間の新たな機能 旧奔別炭鉱跡を舞台にアートプロジェクト(2014)でのトークイベント

NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団では様々な活用実践

により炭鉱遺産を保存、地域資源として次世代へ伝えていくことに取り組んでいる。活用による保存では、炭鉱遺産の歴史を止め大切に保存するのではなく、歴史を重ね、進化させていく価値を見出していく。ただし、その施設や空間の本質的な価値、歴史や場の記憶、事象の喪失や書き換えにならないよう対象の価値、大切な部分の見極めが最も重要である。

### (3) 様々な人たち、組織による保存

炭鉱遺産の保存には、所有者や自治体だけに任せた維持は難しく、結果、損失となる場合もある。地域の資源として価値を共有し、リスクも分散し対応していくこと、また係る人たちが保存活用を実践していくことが、残し、伝えることにつながる。旧奔別炭鉱の選炭機ホッパーを含む炭鉱跡は、所有者とともに市民組織である NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団が管理運営に関わり、公開やアートプロジェクト、積雪により崩壊した屋根落下物の整理では NPO 会員や市民参加で行われている。



写真6 NPO、市民も参加し維持管理する旧奔別炭鉱跡、崩落屋根落下物片付けイベント(2021年7月)

## 6. そして歴史を未来に

2009年に NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団が空知地域のゲートタウン、岩見沢市に拠点となる「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」を開設、活動を始めて13年、主要施設でのアートプロジェクトや各地域でのフットパスイベント「ぷらぷらまち歩き」、確実に炭鉱遺産の認知度は上がり、「地域のゴミ」と言われていた施設跡、ブラウンフィールドは資源として見られるようになってきている。広域連携プロジェクト「炭鉄港」は、空知の「石炭」、小樽、室蘭の石炭積出の「港」、3地域を繋ぐ「鉄道」また炭鉱会社により設立された室蘭の「鉄鋼」が北海道また我が国の近代化をも支えた歴史を

持つネットワーク、炭鉱遺産の保存活用においてさらなる価値となり様々な活動へ繋がっている。2019(令和元年)に「炭鉄港」は日本遺産に選定され、文化財として認められる価値になった。

一方、この間、炭鉱を実体験し、語ってきた元炭鉱マンたちの高齢化は進み、失われつつある。施設の保存は費用と人員の確保で守っていくことは可能であるが、元炭鉱マンや炭鉱時代を暮らした方々の命は永遠ではない。資料とともに「記憶の伝承」が重要な時期に来ている。語り、行動できる人材の育成こそが、残し、伝承できる最大の可能性である。

産業遺産は土木技術の結晶であり、その歴史はまさに土木史への繋がるものも多い。かつて樹木が覆う山であった空知地域の炭鉱エリアは開拓、土木の力で「黒いダイヤ」が掘り出され、我が国の近代化を進め、そしてその引き換えに、「ブラウンフィールド」と呼ばれる荒れ果てた空間となった歴史も持つ。今後、様々な技術と人々の思いが、このブラウンフィールドをどのようなフィールドにしていくのか？

時は刻々と刻まれており連続して歴史は創られている。炭鉱遺産が残ること、記憶が継承されていくことは未来に何を伝えていくのか？

## 6. 参考文献の引用とリスト

年号、施設規模などは次の資料を根拠資料、史的資料として参考とした。

謝辞；「地域の足元の資源を宝に」と空知地域の炭鉱遺産に光を当て奔走し、「炭鉄港」を発案、日本遺産選定後も様々な活用で価値を創造している中、昨年11月26日に急逝した NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団 理事長吉岡宏高さんに感謝と哀悼の意を送る。

## 付録

### NOTES

注1) 2021(令和3)年2月1日発 炭鉄港推進協議会「北の産業革命「炭鉄鉱」本邦国策を北海道に観よ！公式ガイドテキスト」。

注2) 「北海道と薩摩が育てた炭鉄港 産業遺産の物語」パンフレット 北海道空知総合振興局 地域創生部 地域政策課発行。

(Received April 10, 2023)